

# ミームとしてのネコ



ネコ好きだったのではと思わせる、ニルヴァーナのカート・コバーン（一九六七〜九四〇年）。ネコの写真が何葉か残されている。この写真は世界的大ブレイク直前の一九九〇年、ペーヌのクリス・ノヴォセリック（左）の自宅で撮られたもの。中央はセクションドrameのダン・ピーターズ。Photoshot/アフロ

ネコからインスピレーションを受けた文学作品、アート作品は枚挙にいとまがない。ただ描くだけでなく、前提として作者がネコに魅入られている気配がある。ネコはいかにしてヒトのカルチャーを支配するにいたったのか？

# Part 2

## 文学は猫たちのために

野崎 歓（フランス文学者、翻訳家）

古今東西、猫好きの作家は多い。猫は作品のモチーフになり、語り手となり、描写の対象となってきた。「猫好き」という言葉に潜む、作家ひとりひとりと猫の関係性のバリエーションをたどれば、文学の構造と歴史が見えてくる。

### 野性の息吹

およそその名に値する文学であれば、人間だけかかずらつてはいられない。人間ならざるものとの関わりを深めることは、古来、文学にとって必須の任務だった。むしろ、人間側にもみざるエネルギーをくみあげることによって文学は文学たり得てきたとさえ言えるのである。

文学の中の猫たちは、その事実を雄弁に伝えてくれる。何と言っても猫たちはかわいいのだし、とかく文章に欠乏しがちな「愛」を補って



大江健三郎は『日常生活の冒険』で猫の怒りの声を「フィゴ」に、むきでた爪を「植物の芽」に喩えた。猫に限らず、動物を文章に出没させ、読者の心を弾ませるのも特徴。『個人的な体験』には蟹や熊が登場（共に新潮文庫）。

くれる。しかしそれだけではない。猫はときに狂暴であり、野性をむきだしにして歯向かう。とりわけ近代以降、われわれにとって希薄になる一方の生命の力がそこに瞬時、輝き出す。それをうまくとらえ得たなら、文体にもまた貴重な生の脈動が宿るのではないかと作家たちは願わずにはいられない。

さっそく実例を見よう。人間ならざるものたちの生命を作中に取り込むすべにおいて、卓抜した腕前を示したのが大江健三郎（一九三五〜二〇二三年）だ。特にその初期作品におびただしく登場する、動物を用いたイメージ表現の

数々には、いまだに目を見張らせるものがある。『個人的な体験』の主人公「鳥」は、赤ん坊誕生直後の愛人のところにしげ込み、酒をおろす。「甲虫が樹液を飲むように真面目にウイスキーを飲んだ」とはふるっている。そして愛人のベッドでことを終えたのち、床に落ちた靴下を探し「鳥」に対して彼女が浴びせる言葉も愉快だ。

「なにをさがしているの？ 沢蟹をさがしまわる熊みたいな恰好で。」障害のある子どもの誕生という深刻なテーマに挑む作品のこここで、動物や生き物を思い

この続きは本誌でござー！